

保育実習における身体表現遊びの実態及び

受講生の身体表現遊びに対する意識

—保育者養成校における「身体表現Ⅰ」の受講生を対象として—

川野 裕姫子

橘 未都

青木宏樹

KAWANO YUKIKO

TACHIBANA MISATO

AOKI HIROKI

保育実習における身体表現遊びの実態及び身体表現の授業が受講生の身体表現遊びの必要性の意識に対する影響を検討することを目的として、本研究ではアンケート調査を実施し評価した。

調査から、半数近くの実習園(所)が身体表現遊びを実施していなかったが、設定保育実習では多くの受講生が領域「表現」を実施していることが明らかとなった。表現の中でも造形を選択した受講生が半数以上を占め、身体表現は3割程度であり、ごっこ遊びや手遊びなどが多く取り入れられていた。また、受講後、殆どの受講生が乳幼児期の身体表現遊びは必要であると意識していることが明らかとなり、授業の重要性が判断された。本研究においての身体表現の分野に着目し得られた知見は、保育者を目指す受講生が、身体表現遊びを通して子どものこころとからだを育み、感性豊かな自己表現が出来るように導くための手立てとしての貴重な知見をもたらすことができた。

キーワード：保育者養成校、乳幼児、身体表現活動(遊び)、設定保育実習

1. はじめに

幼児の発達において、家族とコミュニケーションを取ること、友だちと遊ぶなど他者と関わる機会を持つこと、そして自己の表現(身体表現等)等の経験は不可欠である。これまでの研究から、十分に他者と関わり、身体表現活動(遊び)を通して自己を表現する機会の得られなかった幼児は、考えを上手く表現することが苦手であったり、人の立場に立って物事を考えたりできない子どもに成長してしまう可能性が示されている。また、物事に対して受け身的で、自分の思いをうまく表現できず友だちとトラブルになってしまった事例も報告されている¹⁾。しかし、少子化や核家族化、共働き家庭の増加に伴い、幼児が家庭において、家族や他者と触れ合う時間は減少している。一方で、保育施設などで一日の大半を過ごす幼児は増加している。乳幼児の発達時期の大半を保育施設で

過ごすということは、保育施設は幼児の発達に大きな影響を与える可能性がある。そのため、コミュニケーションの場や身体表現活動の場を通して自己表現をする環境を保育者は幼児に与えることが必要である。保育施設において、集団生活をする中で自然と他者と関わる機会は得られるが、身体表現活動(遊び)は保育者が意図して取り入れなければ、幼児は経験することが出来ない。

青山ら²⁾は、特に乳幼児期は心と身体を密接に結びつけて自己を表現し、全面的発達を遂げていく時期であると説明している。そして「表現遊び」は、身体を通して考察力や創造性を養い、社会的発達においても互いに共感し合い、コミュニケーション能力を高めると共に、心の発達にも重要な要素が含まれていると述べている。長野³⁾は、幼稚園教育要領や保育所保育指針における「表

現」の領域は、芸術(音楽、絵画、創作等)活動ならびに身体表現活動で構成され、一般的には、「創作ダンス」や「リズムダンス」など舞踊の要素を含んだ身体表現であると説いている。また、近年の子どもたちの豊かな感性や表現力を育むためには、「からだを使ったあそびを伴う自己表現や他者とのコミュニケーション等の精神活動を促し、言葉の発達ならびに健やかなこころとからだをバランスよく育む活動」と捉えた身体表現活動(遊び)が重要であると指摘している³⁾。これらのことは、保育施設において乳幼児に身体表現の機会を多く提供し、子どもの豊かな表現力を引き出し、一人ひとりが表現する楽しさを実感できる指導・援助を行うことの重要性を明らかにした。つまり、保育者においても保育者自身が感性を研ぎ、表現力を豊かにすると共に十分な知識や経験を育むことの必要性が示されている。

しかし、現行の身体表現活動(遊び)の実施には課題がある。実際の保育現場の保育者や保育養成校の学生は、身体表現に対する自分自身の経験不足や苦手(不得意)意識を理由に⁴⁾、身体表現活動(遊び)における指導の困難さを訴えている^{8,9)}。そのため、保育現場での身体表現活動(遊び)は、「手遊び」や「歌や曲に合わせての踊り」を取り入れることが多く、からだの動きをベースにした創作的身体表現活動(遊び)は十分に実施されていないと述べている⁴⁾。また、保育養成校の学生による幼稚園実習時の表現活動の実態調査においても、既成作品(型のある身体表現)のダンスや体操などの実施数が一番多く、ピアノに合わせての自由な創作身体活動(遊び)(型のない身体表現)の実施数は少数である¹⁰⁾。また、林¹¹⁾の保育実習時の活動の実態調査を実施した報告によると、10日間の保育園実習において部分保育活動内容に学生が取り入れた活動は「絵本」が最も多く、続いて「ゲーム」「運動遊び」「制作」であった。身体表現である「手遊び」や「リズム遊び」は1回ずつしか取り入れられていなかった。先行研究において⁷⁾、身体表現の受講生を対象に、授業内容である自己の表現力や理解度の調査を実施したところ、「手遊び」「歌遊び」及び「既成的なダンス(型のある身体表現)」は好んで積極的に活動する、創作的身体表現活動(遊び)(型のない身体表現)に関しては、苦手意識を持つ学生が半分程度いることが明らかとなった。このことは学生自身の身体表現、特に創作的身体表現活動に対する自信の無さを示した。

創作的身体表現活動(遊び)に対する苦手意識を持ったまま保育者として、従事することは表現の機会を幼児に

提供できない可能性が高くなる。そのため、保育現場で求められている保育者のあり方を理解し、上述の長野³⁾が理想とする身体表現活動(遊び)を提供するためには、在学時に幼児の年齢に応じた身体表現能力や身体表現そのものの重要性を理解し多くの経験を積むことが必要である。また、設定保育実習を経験する際も、まずは型のある身体表現活動(遊び)から取り入れ、幼児と共に楽しむことを学び、徐々に創作的身体表現活動(遊び)を取り入れ、段階的に経験を積む機会を保育者を目指す学生は得るべきである。しかし、身体表現活動(遊び)の妨げとなる苦手意識の要因や保育者を目指す学生が乳幼児期の身体表現の必要性を認識しているかは明らかでない。苦手意識の要因や学生の身体表現活動(遊び)に対する認識を明らかにすることで、保育者を目指す学生の身体表現に関する現状の意識を把握した授業の展開ができる。また、本来求められている子どもの内面にある欲求、感性、感情を表出させ、身体活動を介して体力や身体能力の基礎を培うような授業を提供することができる。今後学生が保育実習時の活動や将来の保育現場において様々な創作活動を展開する意欲が湧き、積極的に身体表現を取り入れることで保育実践力を向上させ幼児の発達に貢献することが出来ると考える。

以上のことから、本研究では、保育実習における身体表現活動(遊び)の実態を調査し、身体表現(ダンス)経験の有無は身体表現活動(遊び)の実施に与える影響、および身体表現の授業が受講生の身体表現活動(遊び)の必要性の意識に対する影響を検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者

K短期大学(保育者養成校)における身体表現 I を2020年度に受講した長期履修制 2 回生の計 79 名(男性 3 名、女性 76 名)を対象とした。有効回答 学生 76 名(男性 3 名、女性 73 名)(回収率 96.2%)を解析に利用した。アンケート実施にあたって、事前に研究の趣旨を十分に説明し同意を得た。

本研究の対象となった保育者養成校は、2 年制と長期履修制(3 年制)課程が設定されており、長期履修制在籍の学生は、2 年制のカリキュラムを 3 年間で履修することとなっている。

対象学生は、調査の時点において 1 年次の 9 月に保育実習 I B、1 年次の 2 月に保育実習 I A を終了している。9 月の保育実習 I B では施設にて実習を行い、2 月実施の保育実習 I A では保育園(所)にて実習を行った。

アンケート調査

アンケート調査では、保育実習時における身体表現活動(遊び)(以後、「身体表現活動(遊び)」を「身体表現遊び」とする)に係る実態調査と(参考資料 I -1)、個々の中等教育機関における身体表現(ダンス)経験 (以後、「身体表現(ダンス)」を「身体表現」とする) および身体表現遊びに対する意識調査(参考資料 I -2)の 2 種を二回に分けて実施した。

保育実習時における身体表現遊びに係る実態調査では、保育実習時における実習園の身体表現遊びの実施の有無、設定保育実習時の領域「表現」の実施の有無、設定保育実習時に実施した分野の選択内容、身体表現遊びの実施内容を調査した。本アンケートは 2 月実施の保育実習 I A を対象とし、2020 年度後期の身体表現 I の授業開始時に実施した。

個々の中等教育機関における身体表現経験および身体表現遊びに対する意識調査では、中等教育機関での身体表現の経験の有無と、乳幼児期における身体表現遊びに対する意識および今後取り入れたい身体表現遊びの内容をアンケートにて調査した。本アンケートは、2020 年度後期の身体表現 I の 15 回目の授業終了時に実施した。

統計解析

保育実習における身体表現遊びに係る偏りおよび、学生の身体表現経験、身体表現遊びに対する意識の偏りを検討するために適合度の検定(χ^2 検定)を行い統計処理を実施した。有意水準は 5%未満とした。

用語の定義

本研究において使用する用語を以下の通り定義する。

身体表現遊び

「型のあるダンス」と「型のないダンス」を含む、乳幼児が身体をつかって表現する遊びとした。「型のあるダンス」は構造化され、振り付けや構成があらかじめ決められたダンスであり、既成ダンス・リズムダンス・伝承的郷土的遊戯・手遊び・歌遊び・発表会ダンス・フォークダンスを意味する。「型のないダンス」は探索的・創造的であり、振り付けは決まっておらず即興的に動いたりするダンスであり、模倣遊び・リズム表現・ごっこ遊び・即興的ダンス・身近なものを使った表現遊び・創作身体表現遊び・劇遊びを意味する¹²⁾。

保育実習

保育者養成校で習う教科全体の知識や技能を基礎とし、総合的に実践する応用力を養うために、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする科目とする^{13,14)}。

設定保育実習

部分保育、半日保育、全日保育を含み学生自身が責任をもって保育活動を行うこととする。

3. 結果

実習園(所)の身体表現遊び実施状況

学生(以下受講生)が保育実習に参加した実習園において、身体表現遊びの実施状況を調査したところ、実習園の 41 園が身体表現遊びを実施し、35 園が身体表現遊びを実施していなかった(図 1)。適合度の検定(χ^2 検定)を行った結果、有意な差が認められなかった($\chi^2=0.474$)。

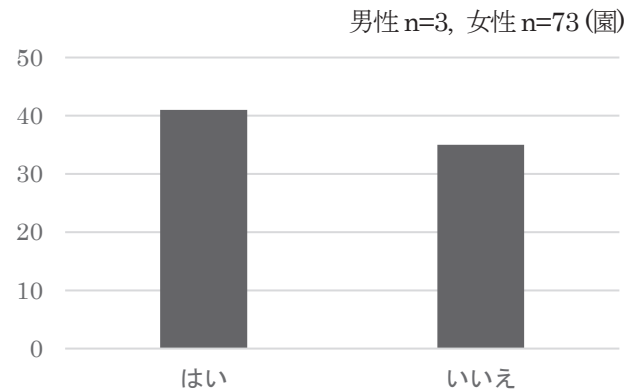


図 1. 実習園における身体表現遊び実施の有無の回答度数(割合)

設定保育実習の実施状況

設定保育実習における領域「表現」の実施状況を調査したところ、53 名の受講生が領域「表現」を実施し、23 名の受講生が領域「表現」を実施していなかった(図 2)。適合度の検定(χ^2 検定)を行った結果、有意な差が認められた($\chi^2=11.842$)。

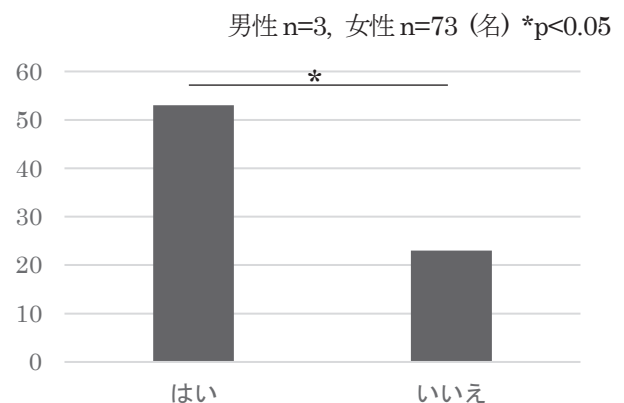


図 2. 設定保育実習における領域「表現」の実施状況

設定保育実習に領域「表現」を実施した 53 名の受講生を対象に実施分野を調査したところ、32 名が「造形」、17 名が「身体表現」、4 名が「音楽」を実施していた(図 3)。適合度の検定(χ^2 検定)を行った結果、有意な差が認められた($\chi^2=22.185$)。多重比較検定の結果、音楽を実施し

た受講生が、造形および身体表現を実施した受講生より有意に少なかった。

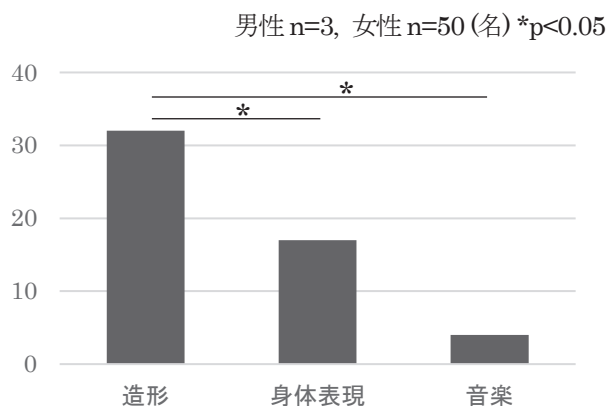


図3. 設定保育実習における領域「表現」の実施分野

設定保育実習時に「身体表現」を実施した17名の受講生を対象に実施内容を調査したところ(複数回答可)、15名の受講者が「型のあるダンス」を実施し、17名の受講者全員が「型のないダンス」を実施していた。実施内容の内訳は以下の通りであった(図4)。「型のあるダンス」では、既成ダンス1名、リズムダンス3名、伝承的郷土的遊戯1名、手遊び9名、歌遊び1名であった。「型のないダンス」では、模倣遊び1名、リズム表現1名、ごっこ遊び11名、身近なものを使った表現遊び2名、創作身体表現遊び2名であった。

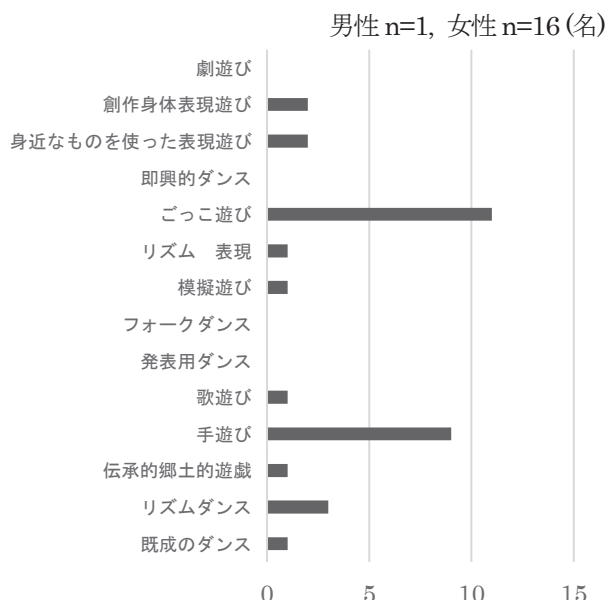


図4. 設定保育実習時に身体表現遊びを実施した受講生における実施内容

中等教育機関における身体表現の経験

中等教育機関における受講生の身体表現経験を調査したところ、中学校と高等学校にて身体表現を経験した受講生は47名、中学校のみで経験した受講生は20名、高等学校のみで経験した受講生は7名、全く経験したことがない受講生は2名であった(図5)。適合度の検定(χ^2 検定)を行った結果、有意な差が認められた($\chi^2=64.105$)。多重比較の結果、中等教育機関で経験した受講生の数は、中学校或いは高等学校のみで経験した受講生の数および全く経験していない受講生の数より多かった。また、中学校のみで経験した受講生は全く経験していない受講生より多かった。

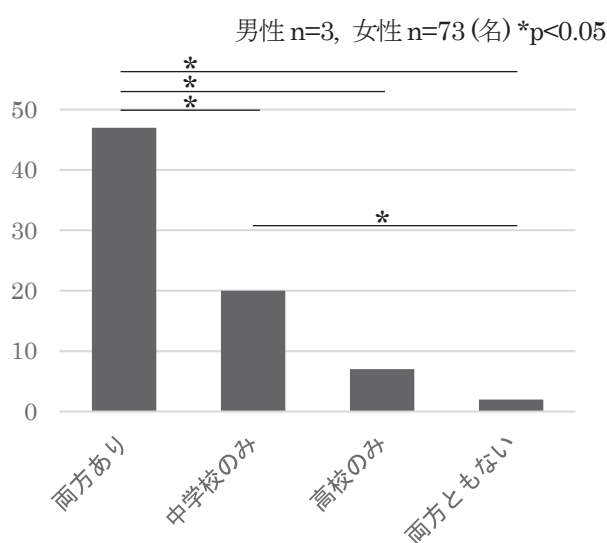


図5. 中等教育機関における受講生の身体表現の経験

乳幼児期における身体表現遊びに対する意識度

乳幼児期における身体表現遊びに対する意識度を調査したところ、「とても思う」と回答した受講生は50名、「まあ思う」と回答した受講生は25名、「あまり思わない」と回答した受講生は1名、「全く思わない」0名であった(図6)。適合度の検定(χ^2 検定)を行った結果、有意な偏りが認められた($\chi^2=88.526$)。多重比較検定の結果、「とても思う」と回答した受講生の数は、「まあ思う」と回答した受講生の数より多く、「あまり思わない」と回答した受講生の数および「まったく思わない」と回答した受講生の数より多かった。

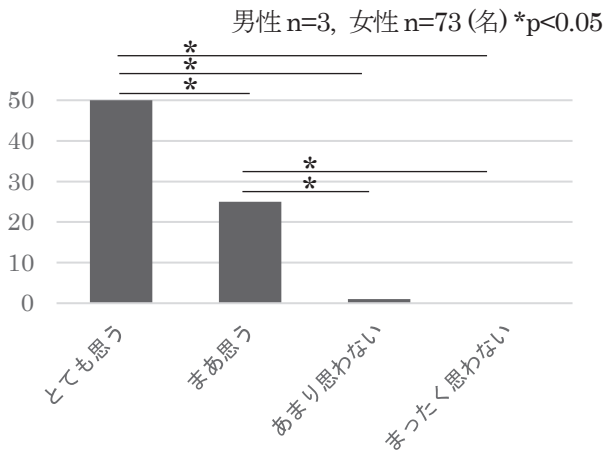


図6. 乳幼児期における身体表現遊びに対する意識度

今後実施したい身体表現遊びの内容

乳幼児期における身体表現遊びに対する認識度の調査で、「とても思う」と「まあ思う」と回答した受講生 75 名を対象に、今後実施したい身体表現遊びの内容を調査したところ(複数回答可) 149 名の受講者が「型のあるダンス」を実施し、97 名の受講者が「型のないダンス」を実施していた。実施内容の内訳は以下の通りであった(図7)。「型のあるダンス」では、既成ダンス 17 名、リズムダンス 36 名、伝承的郷土的遊戯 24 名、手遊び 32 名、歌遊び 24 名、発表用ダンス 11 名、フォークダンス 5 名であった。「型のないダンス」では、模倣遊び 10 名、リズム表現 20 名、ごっこ遊び 26 名、即興的ダンス 4 名、身近なものを使った表現遊び 24 名、創作身体表現遊び 6 名、劇遊び 7 名であった。

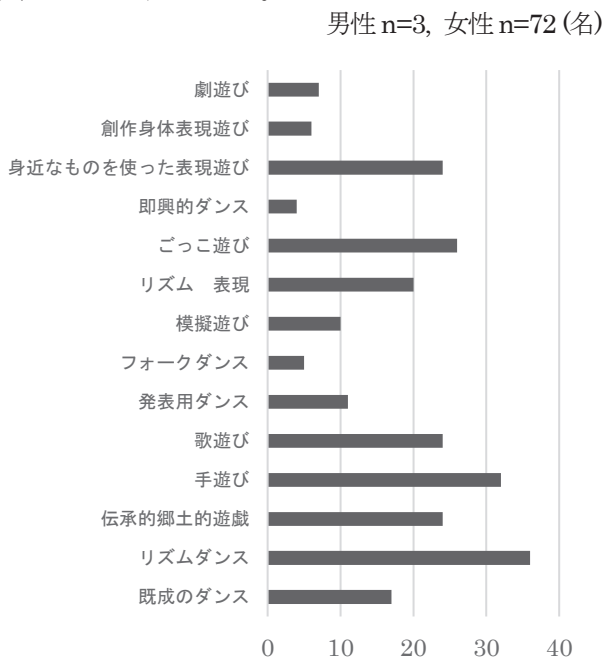


図7. 今後実施したい身体表現遊びの内容

実習園の身体表現遊び実施の有無と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

実習園での身体表現遊び実施の有無が、受講生による設定保育実習時の内容選択に与える影響を評価した結果を図8に示す。実習園が身体表現遊びを実施していたと回答した 41 名の受講生のうち、18 名が「造形」、11 名が「身体表現」、2 名が「音楽」を実施し、10 名が領域「表現」を実施していなかった。実習園が身体表現遊びを実施していなかったと回答した 35 名の受講生のうち、自身の設定保育実習においては 14 名が「造形」、6 名が「身体表現」、2 名が「音楽」を実施し、13 名が領域「表現」を実施していなかった。

		男性 n=3, 女性 n=73 (名(%))			
		身体表現	音楽	造形	活用なし
実習園の身体表現遊び	はい	11 (26.8)	2 (4.9)	18 (43.9)	41 (24.2)
	いいえ	6 (17.1)	2 (5.7)	14 (40.0)	35 (37.2)
		17 (22.4)	4 (5.3)	32 (42.0)	23 (30.3)

図8. 実習園の身体表現遊び実施の有無と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

受講生の身体表現の経験と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

受講生の身体表現の経験が、受講生による設定保育実習時の内容選択に与える影響を評価した結果を図9に示す。中等教育機関で身体表現を経験したと回答した 47 名の受講生のうち、23 名が「造形」、6 名が「身体表現」、3 名が「音楽」を実施し、15 名が領域「表現」を実施していなかった。中学校のみで身体表現を経験したと回答した 20 名の受講生のうち、7 名が「造形」、8 名が「身体表現」、1 名が「音楽」を実施し、4 名が領域「表現」を実施していなかった。高等学校のみで身体表現を経験したと回答した 7 名の受講生のうち、2 名が「造形」、2 名が「身体表現」、0 名が「音楽」を実施し、3 名が領域「表現」を実施していなかった。中等教育機関で身体表現を経験していないと回答した 2 名は、1 名が「身体表現」を実施し、1 名は領域「表現」を実施していなかった。

男性 n=3, 女性 n=73 (名(%))					
	身体表現	音楽	造形	活用無し	
両方 (中・高)	6 (12.8)	3 (6.4)	23 (48.9)	15 (31.9)	47 (61.9)
中学校のみ	8 (40.0)	1 (5.0)	7 (35.0)	4 (20.0)	20 (26.3)
高校のみ	2 (28.6)	0 (0.0)	2 (28.6)	3 (42.9)	7 (9.2)
無し	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	2 (2.6)
	17 (32.1)	4 (7.5)	32 (60.4)	23 (30.3)	

図9. 受講生の身体表現の経験と
受講生による設定保育実習の選択内容の関係

4. 考察

保育実習における実習内容の実態を調査し、実習中の受講生が実施した身体表現遊びの詳細を明らかにした。また、アンケートを用いて受講生が身体表現遊びに対して持つ意識やこれまでの経験を調査し、実習園(所)や受講生の設定保育実習活動の実態及び「身体表現 I」受講後の受講生における乳幼児期の身体表現遊びの必要性に対する意識を検討した。

近年、めまぐるしく変化する社会情勢の中、子どもたちの健全な心と身体の育成を支えることは現代社会における重要課題である。成長過程において、子どもたちが豊かな感性や表現力を養い、創造力を豊かにするにあたり^{15,16)}、身体表現遊びを積極的に取り入れた保育活動は不可欠である。しかし、「身体表現」には、定型的な枠で捉らえにくいことから、研究実績は十分でない¹⁷⁾。そのため、保育実習の実態のみならず、保育者を目指す受講生のこれまでの背景を調査し、身体表現遊びに対する意識に授業や保育実習が与える影響を検討した本研究は、保育者育成校における授業内容構築などに貢献できると考える。

実習園(所)及び設定保育実習時の実態について 実習園(所)の身体表現遊び実施状況

受講生が保育実習に参加した実習園において、保育活動中の身体表現遊びの実施状況は、76園中41園が実

施しており、実施している園の方がやや多い傾向であった(図1)。このことは、領域「表現」の改訂後30年という年月が経っているにも関わらず、未だに身体表現遊びが1日の保育活動のカリキュラムの中に定着していないことが影響している可能性がある。目まぐるしく数多くの行事をこなす幼稚園や保育園では、保育者らが理想とする身体表現活動を展開するための十分な時間的・人的ゆとりがないと指摘している³⁾。更には保育者自身が表現力に自信が持てず、苦手意識から子どもに指導することに消極的になっていること⁴⁻⁶⁾が半数近くの受講生が実習中に身体表現遊びを保育活動に経験できなかった要因であると考えられる。

設定保育実習の実施状況

調査の結果、設定保育実習において約70%の受講生が、領域「表現」(分野:身体表現、音楽、造形を含む)を実施したことが明らかとなった(図2)。また、表現の中でも造形を60.4%の受講生が取り入れており、身体表現は32.1%、「音楽」7.5%であったことが示された(図3)。杉浦¹⁸⁾は、中学校教諭が精神的に最も疲弊してしまう教科は音楽であり、次いで美術となることを明らかにしている。また、保育者養成校を始め大学、短大にかかわらず、多くの受講生は美術に苦手意識を持ち入学してくることが報告されている¹⁹⁾。そのため、保育実習では造形を取り入れることは少ないと予測されていたが、興味深いことに本研究における保育実習に参観した受講生の多くは造形を遊びとして取り入れていた。保育実習までに造形の授業を実施したことで、造形に対する知識が深まり、設定保育実習への準備が経験としても精神的にもできていたのではないかと推察する。造形とは対照的に、身体表現においては、保育実習前に受講生は身体表現を未受講であり、乳幼児の身体表現の重要性や年齢に応じた身体表現活動に対する知識を深め、事前指導を受けることが出来なかった。幼児に身体表現遊びを提供する際は、子どもたちへの言葉かけが随時必要である²⁰⁾。また、恥ずかしさを取り除きリズムにのり積極的に参加するが求められる。そのため、受講生にとって表現力や創造力の高度な技能が必要な創作的な身体表現遊びを取り入れることは困難であり、これまでに授業で習得した技能で実習に取り組んだためと推察する。また、多くの受講生が造形を実施した要因として、竹内²¹⁾が述べているように、音楽や身体表現は、その表現がこの世界に存在し続ける限り、表現者(主体)はその表

現行為を続けていることが必要であり、表現行為を終結すると表現結果は消滅する。一方で、造形表現の場合は、表現結果としてその表現者(主体)から時間的、空間的に切り離されても存在し、完成までの一連の過程であり、その場だけの表現行為だけではない。よって、音楽や身体表現を実施することは受講生自身が主体となり幼児へ働きかけが常時必要となる高度な技術を要し、造形は、見守る時間も発生し落ち着いて幼児に関わることができるため受講生は選択しやすかったと推察される。

設定保育実習では、ごっこ遊びや手遊びなどの受講生が日常的な行動の経験や手軽にできる身体表現遊びを実施していることが明確になった。ごっこ遊びの方が手遊びより少数ではあるが多かったことから、受講生がごっこ遊びの題材のイメージを持って創作表現をしたことが窺える。多久保ら¹⁰⁾の保育者養成校の受講生116名を対象に幼稚園実習時における実施した表現活動内容を9種のカテゴリーに分けて調査した。その結果、表現する内容を特に考える必要が無く、決められた動きをそのまま子どもに伝えることができる表現や自由に内容を変えることができる表現を受講生は好んで表現活動として取り入れることを示した。また、動きそのものに意味づけの必要が無く、子どもに表現するための動機付けが必要となる表現は受講生に懸念されやすいことを示した¹⁰⁾。本研究において、身体表現遊びを実施した受講生17名と少人数であったが、ままごとなどの人物などになりきるごっこ遊びが最も多く取り入れられており、多久保らの結果と類似していた。上位を占めた身体表現遊びの内容と実施されなかった内容も変わりがないことから、本受講生においても余り創作することがなく、手身近に実施できる既成的なダンスを好み、身体表現遊びに対する受講生の意識が類似する傾向であると推察される。

中等教育機関における身体表現の経験

アンケート調査の結果、受講生の61.8%が中等教育機関で身体表現を経験し、中等教育機関のどちらかで35.5%の受講生が身体表現を経験していることが明らかとなった。よって、本学に入学するまでの中等教育機関において身体表現を経験している受講生は98.4%で、殆どの受講生が身体表現を経験していることが示された。

乳幼児期における身体表現遊びに対する意識度

15回の授業受講後、65.8%の受講生が今後の保育活動に乳幼児期の身体表現遊びに対する意識に関して「とても思う」と解答していることが明確になった。また、「まあ思う」と32.9%の受講生が回答しており、殆どの受講生が乳幼児期の身体表現遊びは必要であると意識していることが明らかとなった(図6)。

本研究の対象となった受講生が受講した「身体表現I」の授業では、1.リズム遊び、2.伝承・郷土遊び、3.身体表現遊び①(手遊び～全身を使用しての身体表現)、4.身体表現遊び②(動きからの表現・イメージと動き・即興的な身体表現を伴うお話作り・オノマトペや言葉かけ使用)、5.基本的動作あそびや基本ステップ、6.各種リズムダンスについて実習授業を実践した(参考資料II)。授業では、受講生が自信をもって子どもたちに指導、援助できるように初歩的の技能から基礎技能までの課題を実践した。また、受講生の個人の身体表現能力や創造力の違いを鑑み、グループワークを活用して意見交換などをさせながらの創作活動に入り、子ども役と保育者役を決め実践練習を行うようにした。

特に、今回、受講生の保育実習の実態調査から、設定保育実習にも取り入れやすいような「手遊び」や「リズムダンス(体操)」を取り入れ、難しい創作身体表現遊びに偏らないように配慮した。実践実習と共に乳幼児期の身体表現遊びの必要性について説明し、受講生にも身体表現に関する課題を学修させた。筆者は、以上の授業内容を受講した受講生が、乳幼児期において身体表現遊びの必要性を認識してもらえたのではないかと推察する。しかし、保育実習において、自信をもって身体表現遊びを取り入れるためには、自身の感性を豊かにし、表現力を磨く努力をしてもらわなければならない。そのためには、本学での身体表現の授業において、模擬保育実習を多く活用し²²⁾、今後の設定保育実習には、年齢に応じた身体表現遊びが臨機応変に実践でき、子どもと共に楽しく身体表現ができるような実習の取り組みを期待する。

今後実施したい身体表現遊びの内容

アンケート調査より、型のあるダンスを149名の受講生が、型のないダンスを97名の受講生が取り入れたいと回答していることが示された。川野⁷⁾が指摘するように、身体表現の経験がある、或いはダンスが好きな受講生でも型のないダンスを実施するには、イメー

ジから動きを創作することが難しく戸惑いがあるため、型のあるダンスを半数以上の受講生が選択したと示唆する。また、型のあるダンスの中でも、手遊びやリズムダンスを選択する受講生が多く、慣れ親しみやすい音楽表現も含んだ表現が受講生は取り組みやすいと感じていることを示した。保育を目指す受講生を対象に授業後の学習における自己評価と表現・ダンスに対する意識のアンケート調査を実施した宮下⁸⁾の報告でも、自己の表現とリズムカルな動きについては、半数以上の受講生は満足感や充実感を得ており、リズムカルな動きと創作的身体表現の比較ではリズム系を好む傾向が強いこと明らかにした。本受講生においても音楽を含むリズム的な身体表現を好む傾向にあるが、本授業を通じて、創作することや表現することの楽しさを味わい、身体表現遊びをする意欲や自信が湧いてきていることを窺われる結果であった。

実習園(所)の身体表現遊び実施の有無と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

実習園の身体表現遊び実施の有無に関係なく、60.4%の受講生が、造形を設定保育実習に実施したことが調査から明らかとなった。保育実習以前に造形表現を受講してし、実習前に知識を身に付けていたことで多くの受講生が保育実習で実施したと考える。また、設定保育実習の内容の選択は、受講生が身体表現を計画していても実習園の行事等で時間が確保できず着きない場合や、実習園の保育活動計画により保育士から提案され¹¹⁾、他の分野で実習せざるを得ない状況も発生すると考えられる。

受講生の身体表現の経験と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

中等教育機関における身体表現の経験と設定保育実習時の身体表現遊びの実施との関係を検討したところ、身体表現を経験していても30.3%の受講生が領域「表現」を実施していなかったことから、身体表現の経験は身体表現遊びの実施に影響を与えない可能性が示唆された。しかし、久保²³⁾は、ダンス経験が豊富な受講生は、苦にすることなく楽しんで創作活動に参加し、ダンス経験の乏しい受講生は、創作することが大変困難であり、創作活動に消極的であると述べている。中村²⁴⁾は、受講生の中学校或いは高等学校で経験した身体表現の授業の内容は、現代的なリズムダンスが多く採択さ

れ、理想する生徒一人ひとりが自分なりに音楽のリズムに乗って自由に動きを工夫して踊るダンス授業は提供されていないことを指摘している。このような現状の義務教育や高等学校での表現指導では豊かな表現は身につかないと、米倉⁸⁾は報告している。よって、本研究に参加した受講生も、中等教育機関では少なくとも数年以上に渡る身体表現教育を受けているが、観察実習や参加実習を実践した際に幼児の身体表現が、過去に経験した身体表現とは違うものであり、戸惑いがあったのかもしれない。また、過去の身体表現の経験が楽しいものばかりではなく、他者と比較やその表現自体を否定されるような経験により、人前で身体表現をしたことが苦い経験となり²¹⁾、ただ恥ずかしさだけが残っている受講生もいるのかもしれない。今後の調査においては、過去に経験した身体表現の内容も詳細に調査する必要がある。石川ら²⁵⁾は、人前で一人で発表したり歌ったりする際に、責任をもってできない者が多いことや、人と違う動きや言動に抵抗感や羞恥心を感じる受講生もいることを指摘している。そのため、本受講生の多くは身体表現の経験はしているが、保育実習の時点において、まだ身体表現の授業を受講しておらず、自身の表現力に不安があり実践する自信の無さが設定保育実習に取り入れることができなかった要因とも考えられる。

今後の研究課題

本研究では過去中等教育機関以外での身体表現遊びの経験は不明であり、受講生の特性も調査していない。更に、受講生の身体表現に関する意識調査は身体表現の授業の受講後にしか行っておらず受講前の意識は不明である。今後の研究課題として、受講生の自己省察を分析するために、より詳細な調査を実施する必要がある。

5. まとめ

本研究ではアンケート調査を実施し、保育実習時における身体表現遊びに係る実態と、個々の中等教育機関における身体表現の経験および身体表現遊びに対する意識を調査し評価した。

1. 受講生が保育実習に参加した実習園(所)において、全ての園が身体表現遊びを実施してはいなかった。保育者自身が表現力に自信が持てず、苦手意識から子どもに指導することに消極的になっていることが要因であると判断された。

2. 受講生の約70%が、設定保育実習時に領域「表現」を実施し、表現の中でも「造形」を選択した受講生が60%を占め、「身体表現」や「音楽」よりも多く取り入れたことが明らかとなった。身体表現遊びの実践においては、子どもたちへの言葉かけや、リズムによって積極的に行わなければならないことへの恥ずかしさなどが加わるため、「身体表現」や「音楽」の実施に対し消極的になる傾向があると判断された。
 3. 設定保育実習では、ごっこ遊びや手遊びなどを実施した受講生は日常的な行動の経験や手軽にできる身体表現遊びを実施していることが明確になった。また、手身近に実施できる既成的なダンスを好む傾向であると判断された。
 4. 保育者養成校に入学するまでに97.4%の受講生が身体表現を経験していることが明らかとなった。
 5. 受講後、殆どの受講生が乳幼児期の身体表現遊びは必要であると認識していることが明らかとなり授業の重要性が判断された。
 6. 実習園の身体表現遊び実施の有無に関係なく、60.4%の受講生が、造形を設定保育実習に実施したことが調査から明らかとなった。実習前に知識を身に付けていたことだけでなく、実習園からの支持や提案に影響されたと判断された。
 7. 身体表現を経験していても3割の受講生が領域「表現」を実施していなかったことから、身体表現の経験は身体表現遊びの実施に影響を与えない可能性が判断された。
本研究における身体表現の分野に着目し得られた知見は、保育者を目指す受講生が、身体表現遊びを通して子どものところとからだを育み、感性豊かな自己表現が出来るように導くための手立てとしての貴重な知見をもたらすことができた。
- 6. 引用文献・参考文献**
1. 仲田幸世(2013)イメージをうごくや言葉で表現できる子を育てる援助の方法—劇遊びから劇創りを通して—、沖縄市立美里幼稚園。
 2. 青山優子、井上勝子、蛭原正貴、小川鮎子、小松恵理子、高原和子、瀧信子、宮嶋郁恵、矢野咲子：(2020)乳幼児のための豊かな感性を育む身体表現遊び、(株)ぎょうせい
 3. 長野真弓：(2010)幼児における身体表現活動の実践・研究の課題ならびに科学的視点からの提案、心理社会的支援研究、創刊号、pp29-34、
 4. 高原和子、瀧信子、矢野咲子、怡ゆき絵、青木理子、小川鮎子、小松恵理子：(2016)保育者養成における身体を使った表現(身体表現)指導の実態、第69回日本保育学会、pp71-75。
 5. 宮下恭子：(2011)「学生のダンスや身体表現についての意識や自己評価に関する研究」、東京成徳短期大学紀要第44号、pp1-16。
 6. 米倉慶子：(2017)身体表現指導のあり方、西九州大学短期大学部 幼児保育学科実践報告、pp89-93。
 7. 川野裕姫子：(2021)保育者養成校における学生の身体表現に対する意識と授業の実態に関する調査研究—「身体表現I」の授業活動におけるアンケート調査から—、神戸教育短期大学 教育実践研究紀要 第2号、pp51-61。
 8. 宮下恭子：(2011)学生のダンスや身体表現についての意識や自己評価に関する研究、東京成徳短期大学紀要第44号、pp1-16。
 9. 遠藤晶：(2006) 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について—身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 54, pp91-99。
 10. 多久保治江、田辺圭子：(1997)保育者養成における表現活動について(2)、北陸学院短期大学紀要 第9号、pp27-40。
 11. 林富公子：(2016)実習の実態と立案指導、夙川学院短期大学 教育実践研究紀要、pp33-69。
 12. 松原豊：「幼児の身体表現」、第1巻 リズムスキル・コミュニケーションの発達とダンス—型のあるダンスを中心に—、第2巻 想像力・創造力の発達とダンス、—型のないダンスを中心に—、子ども教室宝仙大学、(株)新宿スタジオ。
 13. 厚生労働省：(2018)「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(厚生労働省雇用均等・児童家庭局長)。
 14. 厚生労働省：(2018)「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(厚生労働省雇用均等・児童家庭局長)、別紙2、保育実習実施基準。
 15. 文部科学省：(2018)幼稚園教育要領解説 第2章 ねらいと内容「表現」

-
16. 厚生労働省：(2018)保育所保育指針解説 第2章 保育の内容「表現」
 17. 古市久子：(2007)身体表現の発達に関する研究の現状と課題、児童心理学の進歩,46, 金子書房、pp171-195.
 18. 杉浦篤子：(2009)子どもと造形、藤女子大学紀要、第46号、第Ⅱ部、pp101-112.
 19. 杉浦篤子、鉢呂光恵：(2001)、保育者養成における造形美術専門者の育成、藤女子大学紀要、第39号、第Ⅱ部、pp39-66.
 20. 塩崎みずほ：(2017)幼児の身体表現遊びにおける言葉がけに関する研究—身体表現遊びのための指導シートの作成をめざして—、秋草学園短期大学紀要 34号、pp111-123.
 21. 竹内貞一：(2010)子どもの表現活動における身体性とコミュニケーション—音楽および身体表現の特性の視座から—、東京未来大学研究紀要、pp131-137.
 22. 上村昌：(2013)保育者養成段階における保育実践力の向上に関する—考察(2)、高田短期大学紀要第31号、pp79-88.
 23. 久保景子：(2019)学生の身体表現に関する意識調査、有明教育芸術短期大学紀要 第10巻、pp93-104.
 24. 中村恭子：(2013)、日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題、Japan Journal of Sport Sociology,21-1,38-51.
 25. 石川ますみ、重松悠希：(2016)保育士養成校における学生の表現活動に対する意識変容につながる指導法の検討①、豊岡短期大学論集 No.13,pp59-68.
 26. 松本千代栄編著：(1980)ダンス表現学修指導全集 表現理論と具体的展開、pp108-163,修館書店.
 27. 青木理子、青山優子、井上勝子、小川鮎子、小松恵理子、下釜綾子、高原和子、瀧信子、宮嶋郁恵：(2019)新訂,豊かな感性を育む身体表現あそび、pp23-75,(株)ぎょうせい.
 28. 本山益子：(2003)子どもの身体表現の特性と発達,19,市村出版.
 29. 矢野下美智子：(2019)保育者養成における身体表現の授業のある方について「身体表現を好きになること」と「授業内容」の関係、広島文化学園短期大学保育学科紀要,pp31-37.

参考資料

参考資料 I : 「身体表現 I」の受講学生の保育実習の実態調査及び授業後における身体表現活動（遊び）に関する意識調査

「身体表現 I」の受講学生の保育実習の実態と身体表現活動（遊び）に関する意識調査のお願い この調査は、研究のための資料としてのみ扱われるもので、個人のプライバシーを侵害したり、研究以外の目的で使用したりすることは一切ありません。安心して以下の調査に協力していただきますようお願いいたします。各設問につきましては、最も該当する番号や記号一つに○をつけて下さい。（ ）内には該当する数字や言葉を記入して下さい。尚、複数回答可能な場合もあります。

I-1【身体表現 I の授業前におけるアンケート】

以下の設問は、2020 年の 3 月と 2020 年 9 月の保育実習における設定保育実習（部分保育、半日保育、全日保育を含む）に関してお尋ねします。

1. 実習圏で取り上げられていた身体表現はありましたか。
 1. はい
 2. いいえ
 2. あなたは、設定保育実習の遊びでは領域「表現」（分野：身体表現、音楽、造形）の活動を取り入れましたか。
 1. はい
 2. いいえ
- 2 の設問で 1. 「はい」と回答された人のみ 3 の回答をお願いします。
3. あなたは、表現活動を取り入れた遊びの中で、身体表現、音楽、造形の中のどの分野を取り入れましたか。
 1. 身体表現
 2. 音楽
 3. 造形
- 3 の設問で 1. 「身体表現」と回答された人のみ 5 の回答をお願いします。
4. あなたは、何故、身体表現活動（遊び）を取り入れたのか。その理由を記述してください。
()
5. あなたは、身体表現遊びの中でどのような遊びを取り入れましたか。下記より選んで回答して下さい。（複数回答可能）
 - (1)型のあるダンス（振り付けや構成があらかじめ決められている）
 1. 既成の曲に振り付けられたダンス
 2. リズムダンス
 3. 伝承的、郷土的遊び（わらべ歌）
 4. 手遊び
 5. 歌遊び
 6. 発表会用ダンス
 7. フォークダンス
 - (2)型のないダンス（振り付けが決まっておらず即興的に動いたり創造したりする）
 8. 模倣遊び
 9. リズム表現
 10. ごっこ遊び（ままごと、忍者）
 11. 即興的ダンス
 12. 身近にある素材を使用した身体表現（新聞紙、タオル、ゴム紐、縄など）=見立てた身体表現
 13. 創作身体表現遊び（生活・体験、空想・物語りの世界など）
- 2 の設問で 2. 「いいえ」と回答された人のみ 6 の回答をお願いします。
6. あなたは、何故、身体表現遊びを取り入れなかったのか。理由を記入してください。
()

I-2【身体表現Ⅰの授業後におけるアンケート】

以下の設問は、身体表現（ダンス等）に関してお尋ねします。

- あなたは、中学校あるいは高等学校の授業で身体表現活動（ダンス等）の経験がありますか？
 - 両方ともある
 - 中学校のみある
 - 高等学校のみある
 - 両方ともない

以下の設問は、身体表現Ⅰの受講終了後の身体表現活動（遊び）に関する意識についてお尋ねします。

- あなたは「身体表現Ⅰ」の授業を受講して、今後の保育活動における保育活動は乳幼児期に必要と思いますか。
 - とても思う
 - まあ思う
 - あまり思わない
 - 全く思わない

1の設問で「1. とても思う、2. まあまあ思う」と回答された人のみの2, 3の回答をお願いします。

- あなたは、保育者として身体表現活動（遊び）が乳幼児期に何故、必要と思いますか。その理由を記入して下さい。
()

- あなたは、今後、保育実習時の設定保育実習では、I-1の5の設問の身体表現活動（遊び）の中でどの遊びを取り入れようと思いますか。I-1の5選択肢から該当する番号を回答して下さい。（複数回答可能）
()

1の設問で「3. あまり思わない、4. 全く思わない」と回答された人のみの4の回答をお願いします。

- あなたは、保育活動における身体表現活動（遊び）は乳幼児期に何故、必要ではないと思いますか。その理由を記入してください。
()

参考資料Ⅱ：具体的な指導内容

1. リズム遊び

音の変化（強弱、高低、リズム）や音楽を感じながらの身体活動を通して、リズムにのる楽しさを味わい、リズム感を養うことを目的とし²⁶⁾、「リズムあそび」を実施する。例として、①手首や腕の回転及び上下移動、②ハンカチやビニールを使用しての回転、あるいはそれらを上下に投げるなど、それぞれの動作を観ながら、手拍子で音の強弱、高低、やリズム変化を行う。また、からだを使ってのリズム変化、曲や色々なリズム（2拍子、4拍子、3拍子）を手拍子や足拍子で行う。また、「落ちた落ちた」の歌のリズム表現を楽しませる。

2. 伝承・郷土遊び

場所を問わずに手軽に遊ぶことができる身近な伝承的・郷土的な表現あそびを取りあげる。伝承的・郷土的な表現あそびは、祖父母から父母へ、父母から子どもへと伝えられ、スキンシップを通して心と心を通じ合わせ、人と人との間に信頼感や安心感を育む重要な役割も果たす²⁷⁾。本授業では学生が懐かしいと思う曲を選曲し、「なべなべそこぬけ、おちゃらかまい、かごめかごめ、花いちもんめ、ずいずいずっころばし」の歌に合わせて表現あそびやゲームを取り入れながら行う。

3. 身体表現遊び①

手あそびは、子どもが集団生活の中で初めて友達とふ

れあい、協力するあそびであり、子どもが親しみやすく表現力を要する手遊びである²⁸⁾。本授業では、手あそび（手をたたきましょう、グー・チョキ・パー、とんぼのめがね、でんでんむし、ひげじいさん、おべんとうばこ、不思議なポケットなど）や歌あそび（全身を使っての身体表現＝大きな栗の木の下で、どんぐりころころ、まつぼっくり、やきいもグーチャーパー、おとけいさん、おちゃらかホイ、幸せなら手をたたこうなど）を取り上げる。学生がよく知っている歌に合わせての身体表現やじゃんけんゲームも取り入れ、表現活動ばかりにならないように配慮する。

4. 身体表現遊び②

動きからの表現やイメージしたことを表現する活動を通して、動く喜びを味わう感性や表現力を養うために、初歩段階から基本段階である①動きから表現（いろいろな動き）、②イメージと動き、③音と動き、また発展として④まとまりのある動きを体験させる必要がある²⁷⁾。本授業では、身体表現の初歩的段階として「みたてて（物、電車など）」、「なりきって（人物、動物など）」、基本的段階として（身近な事象課題の即興的な身体表現を伴うお話づくり）の表現を、また、その展開として（空想・物語の世界から身体表現を伴うお話づくり）と、擬

態語・擬音語・擬声語（オノマトペ）や言葉がけを取り入れた表現を取り上げる。

5. 基本的動作あそびや基本ステップ練習

この体験は子どもに欠かせない身体能力を養うために必要な基礎技能である⁶⁾。基本的な動きである歩く、走る、とぶ、ころがる、まわる、ゆれる、その他（押す、引く、つく、ちぢむ、のびる、緊張、脱力）を実施する。基本ステップはダンスの基本技能であり、創作リズムダンスへと発展させるためには必要な要素となる。様々なステップ（2拍子、4拍子、3拍子、スキップ、ギャロップ、ツーステップなど）に上半身の動きを加えて指導する。

6. 各種リズムダンス

学生にとって「表現あそび（猛獣狩りに行こう、落ちた落ちた）」、「型のある踊りの創作（子どもが踊れるフォークダンス）」、「音楽に振り付ける（子どもの歌＝おもちゃのチャチャチャ、ぶんぶんぶんなど）」²⁸⁾の表現活動は、楽しいことが明らかであり²⁹⁾導入した。表現活動がスムーズにできない学生に配慮し、中学、高等学校でも取り入れているフォークダンス（ジェンカ、タタロチカ、マイムマイム）や音楽（選曲：おもちゃのチャチャチャ）に合わせた創作リズムダンス（グループワーク）を行う。本授業では、リズムダンスを創作し、踊る楽しさを味わい、次のステップに繋げるようにする。

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、保育実習における身体表現遊びの実態及び受講生の身体あそびに対する検討をしっかりと、アンケート調査を行っています。

多くの受講生が乳幼児期の身体表現あそびは必要であると意識していることが明らかになり、授業の重要性が判断されたことは、身体表現遊びを通して、子どもの心と身体を育み、感性豊かな自己表現ができる手立てとして貴重な知見をもたらしたと考えます。

本実践報告の知見が多くの先生方に共有されることを願っています。

（担当：今津 香）